
君と永遠《とわ》に

光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と永遠^{とわ}に

【Nコード】

N86270

【作者名】

光

【あらすじ】

高校二年のトオルの目の前に、突如現れた一人の姫。タイムスリップして、現代にやってきたのだ。少しずつ二人は惹かれあっている。共に過ごそうと、気持ちが高まったその時。二人の運命は・・・

時は戦国。緑豊かな草原を、一頭の白馬が駆け巡る。

「お待ちください！姫様！」数人の家臣が、白馬を追いかけている。追われているのを楽しんでいるかのように、白馬はなお走り続ける。

「姫様！お待ちください！」ゆっくりと白馬のスピードは落ち、家臣の方へ頭角を向ける。

「姫様！何度言ったらわかってくださいますか！勝手に城を抜け出されては困りまする！」

ささ、城に戻りましょう」

長く伸びた艶のある髪、肌は白く まさに姫にふさわしい容姿である。

「何度言われても、これが私の唯一の楽しみ。かえでの背にまたがりこうして風を切っていると気持ちがいいのじゃ。のう、かえで」白馬の頭をなでながら姫は笑っている。

「何度も申し上げます。落馬なされたらどうなさいますか！姫様に万が一のことがないよう

わたくしがお仕えしておるのです。それに殿が・・・」「わかったわかった、もう聞き飽きた。帰るぞ かえで」家臣は一つ大きなため息をつきゆっくりと かえでの後に続き城へ向かう。大きな門をくぐりぬけ、ひよいと軽々かえでから降りると「今日も楽しかった。かえで、明日も行こうな」かえでを愛おしく見つめ優しくなでていると「きよ、又そのようなりをして・・・早く着替えてきなさい。」きよが振り返ると そこには風貌のよい優しい父上、それにぴったり寄り添う美しい母上がいた。きよは二人に大層愛され、大切に大切に育てられてきた。着替えを済ませ髪を整え二人の元へ。父と母が心配そうな顔をしてきよを見つめる。「なあ、きよ。お前がかえでを可愛がっておるのはわかる。しかし かえでも、もう年じゃ。そろそろかえでに乗るのはやめてもらえんか？」一瞬にして

きよの顔が曇る。「でも父上。かえでという時間は私にとって唯一の楽しい時なのです。無理はさせません。どうかお許しください。」腕を組みじっと考える父「いや、ダメじゃ。お前に何かあってからでは遅い。もしお前がかえでという時 万が一何かあれば、かえでを処分しなくてはならなくなる。それが嫌なら 父の言うことを聞いてくれ」「そうですよ、きよ。面倒は今まで通り見てやればいいのですから。それに、もう少し姫君らしくお稽古事に励むよう」涙を流しながら、コクリとうなずく。夕刻「かえで、もう一緒に走ることはダメだって。父上に背くことはできない。最後に、最後にもう一度だけ かえでと思いつき風を切りたい。かえで・・・いいだろ?」かえでにまたがり、きよは城を抜け出し走り出した。いつもの場所へ、緑豊かな草原を夕陽を見つめながら走る。その時だった! 突然かえでが驚いたように上半身を天高く突き上げる。「かえで! どうした!? かえで? 落ち着いて、落ち着くのじゃかえで」しかし かえでの興奮は落ち着くことなく、とうとうきよは、かえでから落ち気を失ってしまう。

「トオル! 早くしなさい!」大きなあくびをしながら、まだ眠そうな目をこすりカーテンを開ける。朝陽が眩しい。今日も暑くなりそうだ。まだ7時だっていうのに蝉がやたらと鳴いている。階段を下り、リビングのソファアーに腰を下ろす。都立高校二年、今井トオル、17歳。すらりと伸びた身長はすでに父を超えている。「トオル、休みだからってのんびりしてちゃダメだぞ。明日からしっかり勉強して志望校に入学できるように。わかったな」目の前には両手いっぱい新聞を広げ、こちらを見ることもなく口癖のように言う父。明日から夏休みか・・・「ああ、わかってる」適当に返事をする。大手金融機関に勤務する父、真一。転勤が多く単身赴任が長く続いたせいかトオルにとって父は生活費を持って帰ってきてくれる存在でしかなかった。「さ、トオルも早く食べちゃって。お母さんも出かけるから」お世辞にも綺麗とは言えないが、母の美智子はスーパ

ーにパートとして働いている。明るい性格で社交的なので、近所の人とも交流が深くお誘いも多い。「また出かけるの？今日はお店休みでしょ？お母さんはいいなあ。どこに行くの？何食べるの？」食いつくように聞いているのは妹の美香。中学2年でテニスに没頭して真っ黒に日焼けしている。妹の美香は活発な性格で勉強もそこそこできる。友達も多く毎日楽しく学校生活を送っているようだ。「いってきまうす」美香が先頭を切って出かける。続いて真一が一週間の出張のため大きな荷物を抱え腰を上げる。「じゃ、いつてくる」「気をつけてね。いつてらっしゃい」美智子が玄関まで見送る。トオルも朝食に手をつけ始め、一学期も終わる学校へ向かった。

「じゃあな、トオル！また携帯すっから」右手を軽く上げこちらを見ているのは親友の卓也。「おお、じゃまた」卓也の横にはミニスカで目の周りが真っ黒にメイクされている卓也の彼女 綾。ゲッ！なんだ？いつものことだが、トオルにはあのメイクがどうも苦手だった。トオルに彼女がいないからと卓也が気を利かせて綾の友達を何回か紹介してくれたのだが、皆 綾のようなメイクをしていたからか、いや、トオルはさほど彼女が欲しいと願ってはいなかったのだ。どれも適当に断ってきた。だが、お節介な綾が夏休みの間 また友人を紹介するからと卓也を通じて言ってきたのだ。あまり気乗りはしなかったが、又今回も適当に断れればいい・・・その程度に思っていた。大通りを抜け、トオルは大好きな場所へ足を向ける。小高い丘には大きな木があり、風が心地よくトオルはここで綺麗な景色を眺めながらぼんやりするのが好きだった。鞆を放り投げ大の字に寝転がる。「あーやっぱここはいいよな、気持ちいい」と手を大きく広げた時だった。ドサッ！！「いてっ！なんなんだよ！」トオルの上に誰かが乗っている。えっ？何が起きたんだ？「おい！あんな、大丈夫か？」気を失っているようだ。トオルは大きな木を見上げる。木に登ってたのか？それにしても なんだこいつの格好？頭を強く打っているかもしれない、とにかく病院に連れて行かなき

や。まったく！折角の俺の時間。台無しになっちまった。背中に担ぎ病院へ急ぐ。

中川クリニックの待合室。子供のころからお世話になっている中川先生は　とても気さくで留守がちだった父に代わりトオルをよく可愛がってくれた。「今井さん、どうぞ」看護師に呼ばれ診察室に入る。「ああトオル、御苦労さんだったね。軽いのうしんとうだよ。今よく眠ってるけど、目が覚めたら帰っていいから」よかった・・・「トオルの知り合いか？」「いや、あの丘で寝転がってたら突然この人が落ちてきて」「へえ、でも何かの撮影か？妙な服装だもんな。女優さんとか？トオル、命の恩人とかってテレビにでたりして」中川先生は子供のように笑いながら「じゃ、俺これから学会があつて出かけるんだ。またな」そう言つて診察室を出て行った。どうすんだよ、いつ目が覚めるんだ？めんどくせゝな、このまま俺も帰っちゃおうか。そう思つて椅子から腰を上げようとした時「うう・・・」「おい、あんた大丈夫か？」目をそつと開けるとほつとしたような表情のトオルが覗いている。

「そなたは誰じゃ？」妙な言葉遣いにトオルはチツ！と軽く舌打ちをした。めんどくさそうに「今井トオル。軽いのうしんとうだって。じゃ俺は帰るから」椅子から立ち上がった。トオルの腕をぐつと掴む。「なんだよ！」「ここは、ここはどこじゃ？」「病院だけど？」「病院とはなんじゃ？」なんだこいつ？頭打つて本当におかしくなつたんじゃないの？コンコン、診察室のドアが開き看護師が入ってきた。「あつ、良かった。目が覚めたのね。先生が帰つてもいいつておっしゃってたから、気をつけてね。」妙な格好の女を連れ洩々トオルは診察室を出た。「あんた、金持ってる？」首を横に振る女にトオルはまた軽く舌打ちをした。「しょうがねゝな」

周りの人がトオル達を珍しそうに見る。じろじろ見てんじゃねゝよ。心のなかでトオルは思った。隣の女は景色に驚いたようにきよろき

よろしている。「じゃ、俺帰るから。あんた一人で大丈夫だよな？
じゃ」しばらく歩きだしたが溜息をついて振り返ってみると、トオルの後ろにぴったりとくっついて女が歩いていた。やっぱり・・・
「なんなんだよ！」「ここは・・・ここはどこじゃ？」ポツリと女がつぶやく。「あんた本当に覚えてないの？あそこの木からあんたが落ちてきたの。だから病院に行っただよ。医者に診てもらったの。わかった？」「医者に診てもらったのか？おぬしが助けてくれたのか？」

「医者って事はわかるんだな、それより何なのその言葉遣い。何かの撮影？でもそれらしい人いないよな」辺りを見回す。「おぬし、トオルって言ったか？私はきよ。かえでと一緒にいつものように走っていたら突然かえでが何かに驚いて、それで・・・」きよは精一杯思い出してトオルに話して聞かせた。「へー、じゃあんた、馬から落ちたんだ。ハハハ」「なにがおかしい！」きよはムツとする。
「だってそうだろ？木の上に馬はいなかったぜ、あんたは馬じゃなくて木から落ちたの、わかった？」きよは頭を抱えて泣きだした。
「ここは一体どこなのじゃ？父上は？母上は？かえでに会いたい」きよが泣きやむのを待ち「あんた、これからどうすんの？警察に行く？記憶が戻るまで保護とかしてくれると思うしさ。そうしよう、なっ。」トオルは怯えるきよの手をとり交番へ向かった。トオルは警察に事情を説明しきよを預けた。今度こそやっと帰れる。きよがこちらを見ている。置いていかないでと言わんばかりの眼差しで。振り返らずトオルは廊下を歩き出口に向かった。トオルの足が止まった。「あゝもう！」

「なんでこうなるんだよ」きよはトオルの腕にしっかりと腕をからませ必要以上にぴったりくっついていいる。「すまんな、トオルとやら父上に会えたらおぬしの事しっかり話し、たんまり褒美をつかわすぞ」きよが初めて笑った。この時トオルはきよの顔を初めてしっかりと見た。きよは、パンダ目じゃないんだ。そんな事を思いなが

ら きよと家に着いた。トオルは玄関をそ〜と覗く。美智子も美香もまだ帰っていないようだ。面倒な真一は一週間帰ってこない。今だ！トオルは きよの手をとり自分の部屋のある二階へ駆け上がった。ふう〜、と溜息をついた。さて、とりあえず・・・よく見るときよの着物は土がついて随分汚れていた。おふくろや、美香が帰ってきたら又ややこしくなる。美香の洋服でも借りてきよに「ただいま〜」やばい！美香だ。美香は好奇心が強くて何でもかんでもしつこく聞いてくる。厄介な奴が帰ってきた。案の定あ〜という間に美香が「お兄ちゃん帰ってるの？」トオルの部屋のドアを一気に開けた。きよを見つけた美香はみるうちにニヤニヤし始め「こんにちは、妹の美香で〜す」きよはキョトンとしながらも「きよと申します。トオルに世話になって」「トオルだっ〜」美香はトオルを冷やかすように指でツンツンしてくる。「うるせ〜、それより美香、お前の洋服貸してくれよ」「いいけど、でもきよさん随分汚れてるよね。私も部活で汗かいたから 一緒にお風呂入りませんか？ね？いいでしょ？はい決まり」鼻歌を歌いながら美香は浴室に湯をはりに一階へ下りた。「きよさ〜ん、はやくはやく〜」美香にほぼ無理やり連れて行かれたきよ。シャワーを出した音がした。と同時に「ギャァ〜」と叫ぶきよの声が響き渡った。

「あ〜気持ちよかった。でもきよさんシャワーくらいでびっくりしないですよ。ドライヤーかけてあげようとしても驚いてるんだもん。」結ってあった髪は綺麗に洗髪され優しく丁寧に美香がとかしてあげたので きよの髪は艶やかで綺麗だった。「でもさ、きよさん この簪綺麗だよね」「それは、母上が下さった大切な簪です」きよはじつと簪を見つめた。訳ありな空気を察してか美香は「じゃ、私は勉強があるから。お兄ちゃん後はよろしく」「おっ、サンキュ」トオルは、簪を見つめるきよが気になって仕方なかった。この話し方、あの服装に髪型。馬から落ちたって・・・トオルはきよに「覚えてることだけでいいから、俺に話してくれないか？力になるからさ、

それまで俺が助けてやるから」あれ？関わりたくなかったのに、めんどくさかったのに。きよは簪を両手でしっかりと握りしめトオルの目をしっかりと見て話し始めた。「マジ？？？マジで？じゃあ、あんた過去から来たって事？そんなことあるのか？」トオルはパニくった。やっぱり関わらなきゃよかったか？でもきよの純粋な瞳は嘘をついていると思えなかった。どうにかして還してやればいいんだ。そうだ、卓也に相談してみよう。明日にでも卓也に連絡を取って相談してみよう。きよにそのことを話し、二人はやっとほっとした。なんとかなると思った。「ただいま」「おかえり、ねえお母さん、お兄ちゃんがね・・・」トオルが美智子に説明する手間が省けるほど美香は機関銃のようにきよの存在を美智子に話す。「へえ、トオルにもやっと彼女ができたんだ、どんな感じだった？」キッチンから二人の楽しそうな会話が聞こえてくる。

「トオル、彼女も一緒に夕飯にしましょ」下から美智子がワントーン高い声で呼んでいる。早くトオルの彼女の顔が見たくて仕方がないのだ。「飯だって、行こうか」「良かった、私腹が減っていたのじゃ」フフ、相変わらぬ口調にトオルは笑った。一階に降りると美香が「こっちこっちときよに手招きをしている。「トオルの母です。きよさん？いつもトオルがお世話になって。今日からしばらく主人がいなくて、トオルも彼女連れてくるなら言ってくれたらいいのに。何にも言わないからこんなものしかないけどどうぞ食べてくださいね」ちらっと美智子がトオルを見る。「彼女じゃないってば」きよは「ありがたいお言葉。トオルには本当に世話になって申し訳ござりません。このご恩はいずれ」「そんな大げさなこと」美香が笑う。食卓には、美智子の得意な肉じゃが、サラダに味噌汁、ちよっとした付け合わせがある程度だったがきよは「このような御馳走は見たことがない」とえらく感動しきよの言葉遣いに美智子も美香も少々驚いてはいたがきよの嬉しそうな表情と美味しそうに食べる姿を前にトオルはホッとした。美香が学校の話やテニス

部の事など、きよにずっと話すため、美智子が下手にきよに質問することもなく、それなりに楽しい夕飯だった。「お母さん、きよさんね、しばらくうちに泊めてあげてほしいって、お兄ちゃんが」ニヤツとしながら美香がトオルを見る。余計な一言も多いが、タイミング良く言いくいことを言ってくれるのも美香だ。「そうね、トオルの部屋じゃなんだから、美香の部屋なら・・・」「やったー！よかったね、きよさん。美香の部屋に泊まっていって」きよに美香が抱きつく。「何から何まで・・・」礼を言いかけるきよを遮るように美香は「行こう」きよの手をとり二階へ行ってしまった。ソファーに横になって、今日一日色んなことがありすぎて疲れたなあ・・・初めてきよと会ったあの丘を思い出していたら、いつのまにかウトウト、トオルは眠りについた。

トントントン・・・キッチンからいい匂いがしてきた。母さん？母さんが二人？なわけないか。美智子の隣にはきよが立って美智子と一緒に朝食を作っていた。「本当にやったことないの？」「はい、係のものがおりましたので」「へーきよちゃんのお宅ってお金持ちなんだ」美智子は「でも、上手いじゃない？家にいる間は教えてあげるわよ。女の子はこれぐらいできなきゃね。あつ、トオル起きたの？そんな所で寝てちゃ風邪ひくわよ。母さん朝食済ませたらパートに行くから、後片付けよろしくね」三人で朝食をとり、美智子はさっさと出かけてしまった。きよは時計をじっと眺めている。「これは、時を刻んでいるのじゃな。この世には、想像もつかないものがありすぎる」きよが目覚め一階に下りた時美智子は洗濯機を回していた。ぐるぐる回る衣類を飽きもせず、ずっと見つめていた。昨夜もそうだった、何やら小さな物体が光を放ちながら音が鳴り、美香は物体に話しかけて一人で笑ったり、そうかと思えばその物体を見て笑ったり不可思議なことばかりだった。「それは、なんじゃ？」「は？携帯じゃん。きよさん持ってないの？ちよっと待って今友達に返信してるから」美香の携帯とやらをそっと覗くと、文字がずら

りと並んでいる。書物のようなものなのか？きよには全てが驚きだった。美香と入った風呂もそうだった。へんてこな形の口から水が出る。わざわざ水汲みに行かなくてもこの世には水が出る口がある。そんな事をトオルに延々話してみた。「あんたがいた昔とは違って何もかもが便利にできているんだ。美香が持っていたのは携帯って言って、離れている人と話したり、手紙のようなものを書いて送ったりできるんだよ」「信じられん・・・なんて不思議なんじゃ」「苦笑しながらトオルは「今日はどうしようか。図書館にでも行ってあんたのいた世界調べてみつか。何か手掛かりになる物が見つかるかもしれないし」ぐっすり眠っている美香のクローゼットから適当に取り出した洋服をきよに着せ。

「なあトオル」「あ？」「これはちよつと・・・」「なんだよ？」短いスカートなんて履いた事がない。まして人前で足をさらけ出すなんてこともなかった。「あゝ短すぎた？美香はそういうのしか持っていないからさ。」「真っ赤に頬を染め きよはうつむいている。」「大丈夫だよ。見てみるよ、あんたぐらいの年の子は皆そんなだぜ。」「周りを見渡すと、ほとんどの子が短いものを履いて生足を惜しげもなくさらけ出している。二人は図書館についた。どれから見たらいいのか、歴史が苦手なトオルはパラパラと適当に読み始める。（きよ）と言う名の姫のことは書いてない。食い入るようにきよは見つめるが これといったことは何一つわからなかった。「わたしは、もう二度と父上や母上のもとに帰れないのかもしれない」きよが寂しそうに呟く。かわいそうに思ったトオルはきよの手を引き図書館を後にした。たどり着いたのは洋服の店。うるさい音楽がガンガンかかって、きよには耳が痛かったが、きよと同じような年ごろの女の子があれやこれやと楽しそうに洋服を手を取っている。「俺が買ってやるよ。美香のスカートじゃ嫌だろ？」「好きなものを選んでもいいのか？」一瞬にして きよの顔がパツと明るくなった。いつの時代も女は着るものが好きらしい。「あんまりバイト代残ってな

いから、安いのしか買ってやれないけど」人混みにまぎれて きよは楽しそうに選んでいる。手に取ったものを試着するよう店員に勧められ 「トオル！どうじゃ？似合うか？」大きな声で叫ぶから客が一斉にトオルに注目する「いいんじゃないの」適当にかわす。すっかり陽が落ちた道をとぼとぼ歩きながら「トオル、今日は本当に世話になった。ありがたいと思うておる」「この時代は ありがとうって言うんだよ」「そうか、ありがとう・・・か。ありがとうトオル」きよを元の世界に戻してやれないかもしれない。だったらもつと、こちらの世界をきよに教えてやらなきゃ、そのへんてこな言葉遣いも。トオルはご機嫌なきよの横顔を見ながら そう思っていた。

着信音で目が覚める。時計を見ると11時を回っていた。眠りすぎた。携帯画面には卓也と出ている。「もしもし・・・」「やつとでた！いつまで寝てんだよ！今日だからな」「何が？」「もう、何言ってるんだよ。綾が友達連れてくるから、お前1時にルビーの前に来いよ」ツーツー・・・電話は切れた。そうだ、夏休み前卓也の彼女が友達紹介するって言ってたっけ。ルビーはトオル達がよく行く馴染のカラオケBOX。着替えを済ませリビングへ。「トオル、もう昼になるぞ。今日はどうする？」トオルが起きてくるのを今か今かと待っていたきよが話しかける。「きようはちよつと・・・用事があるから」「そうか、そうだな。トオルも忙しいんだし、私なら大丈夫じゃ。母君から買い物も頼まれてるし、母君のスーパーは今日安くしてくれるらしいから来るようにって頼まれてるんだ。」美智子がパートに行っているスーパーのチラシを見せながら きよは微笑む。「悪いな・・・」きよを置いて出かけるのは少し気が引けた。まして、あまり気乗りのしない約束だったからなおさらだ。最初から断っていればよかった。少しだけ話してすぐに帰ろう。そう思って約束の1時に間に合うようトオルは家を出た。ルビーの前にはすでに卓也達がいた「よ、トオル」「こんにちは、トオル君

この子友達の江里子」やっぱり・・・綾と同じように濃いメイクに髪は茶髪、どうみても高校生には見えない。トオルは軽く会釈した。四人はルビーに入った。その頃、スーパーで買い物をしていたきよ。きよを見つけ美智子が声をかける「きよちゃん、迷わず来れるようになったのね。心配してたの。どう？買い物できた？」「母君がすっかり印してくれたおかげで、全部わかったぞ」「そう、良かった。今日は主人が帰ってくるの。トオルのお父さん。きよちゃんのこと話さなきゃね。少し堅物だけどきっとわかってくれると思うからそれに、きよちゃん、私に代わって本当によく家のことしてくれてるし、ちゃんと話すから心配しないでね」トオルの父上か、どんな人だろう。わくわくしながら家路に急ぐ。母上に書いてもらった通りに料理を作る。この一週間できよは本当に色んな事を覚えて家事もこなせるようになってきた。夕方、美香と美智子が帰ってきた。「さつき、そこで美香に会ったの。すぐに手伝うわ」ダイニングテーブルには美智子を書いたように出来上がった料理がすでに並んでいた。「すごい、これきよさんが作ったの？」美香が驚いている。照れるように「父上が帰ってこられるのじゃ、母上は仕事がある。美香は部活があって毎日疲れているし、少しくらい私も役に立ちとうございます」「ただいま」真一が帰ってきた。「お帰りなさい。御苦労さま」玄関まで美智子が迎えに行く。誰だ？と言わんばかりに真一はきよをじっと見つめている。「あなた、実はね」今までの成り行きを真一に話す美智子。真一は腕を組んだまま難しそうな顔をしている「トオルは？トオルはどこで何をしているんだ？」「友達と今日は・・・」「大学受験に備えて夏休みしっかりやるように泊めたりして！」「だって きよさん行くところがないんだもの。そんな言い方かわいそうだよ」美香が必死でかばう「そうよ、あなた きよちゃん慣れないこと一生懸命やってくれてるの。今日だってあなたが帰ってくるからって きよちゃんが夕飯一人で準備してくれたのよ」「ねえ！お父さんいいでしょ？」美香が真一の腕をつ

かみ頼んでいる。「父上のおっしゃる通りです。私はトオルや母上、そして美香ちゃんに甘えていたのです。本当に申し訳ない」きよはそう言うの家を飛び出してしまった。

トオルが携帯を覗く。美香から着信が山のように入っていた。「ちよつとごめん」部屋を出て美香に電話をかける「お兄ちゃん！何やってんのよ！きよちゃんがいなくなっちゃったの。お父さんが、怒鳴るからいなくなっちゃったんだよ」すすり泣く美香の声「わかった。すぐに探す」トオルは「悪い、急用ができたから」言い終わらないうちに部屋を出てしまった「おい！トオル！」卓也の声がトオルには耳に入らなかった。どこに行っただよ、道もろくに知らないくせに。何時間たっただろうか・・・きよを探すのにあちこち走りまわった。暗がり数人の男たちが話している。「一緒に遊ぼうよ」「離せ！」「なんだよこの女。随分強気じゃねーの」きよ？きよだ！「きよ！」トオルは駆け寄った。「なにやってんだよ！心配するだろ？」「トオル・・・」一人の男がトオルにつかみかかる「兄ちゃん、俺達が先に声かけたんだ。アツチ行つてな」男の手を振り払い「帰るぞ」きよを引っ張る。「邪魔すんじゃねーぞ」男たちがトオルに殴りかかってきた。乱闘になったが相手は三人。トオルは地面に倒れた「チェッ！行こうぜ」三人はぶつぶつ言いながら暗闇へ消えて行った。「トオル、トオル」きよがトオルを抱き起こす「大丈夫か？トオル？」きよは目にいっぱい涙をためてトオルを抱きしめた。「これくらい大丈夫だよ。悪かったな、美香に聞いたよ。親父がひどいこと言っただけ。ちゃんと親父に話すから。それに今日きよを一人置いて出かけちゃって・・・悪かったな」「トオル、初めて　初めてきよって呼んでくれた。トオルありがとう」きよは倒れているトオルの上半身をしっかりと受け止めぎゅっと抱きついたまましばらく離れなかった。

「本当なのか？」真一が信じられないといった表情でトオルを見つ

める。「ああ、俺も最初は信じられなかったんだけど、落馬した瞬間タイムスリップしたらしい。どうやったら元の世界に還れるのか全然見当もつかないし」「そうだったの、だからきよちゃん話し方も不自然だったのね」美智子も驚いている。「私は最初から何か変だと思っていたわ」想像してなかったくせに知ったかぶりの美香が言う「でも、きよさんのお父さんやお母さん、突然きよさんがいなくなって心配してるだろうね」「そうよね、きよちゃんだって会えなくて寂しいわよね」真一の顔を皆で一斉に見る「わかったよ、よくやってくれてるみたいだし。行くあてがないなら仕方ない、でもトオルしっかり勉強だけはしてくれよ」皆の顔がパツと明るくなった「親父ありがとう」そう言うつもりだったのだが「お父上ありがとう」きよは真一の手をとり真っ先にお礼を言った。美香と姉妹のように仲良く、美智子にも真一にも可愛がってもらいながらきよは一生懸命家事をこなした。そんなきよを見ながらトオルは思った。このまま楽しい時が過ぎたらいいのに。とんちんかんな事を言ったり時にはドジなきよをトオルは段々愛おしく思うようになった。日がたつにつれトオルの心はきよに惹かれていった。きよもまた、優しく頼りになるトオルに心を奪われていた。あつという間に夏休みは過ぎ、二学期が始まろうとしていた。お風呂からあがりベッドで横になっていると「トオルちょっといいか？」きよがノックする「ああいいよ」ベッドに並んで座った。「何？」トオルが聞くと恥ずかしそうにきよが二枚のチケットを差し出す。「母上が、夏休みの間よく手伝ってくれたからって、下さったんだ。トオル一緒に行ってくれないか？」

日。夏休み最後だしな、

遊園地のパスチケットだった。「もちろんだよ。行こう今度の日曜よし。思いっきり遊ぼう」やったー！きよは子供のようにベッドで跳ね上がり喜んでいる。

「じゃ、気をつけてな」「きよちゃん、今日はたくさん楽しんでき

てね」真一と美智子に玄関まで見送られ二人は出かける。「いってきます」快晴の朝、デートにはもってこいの天気だ。車にはきよも見慣れてはきたが遊園地の乗り物全てがきよには新鮮なものだった。随分歩き回り沢山の乗り物にも乗った。「少し休もうか」ソフトクリームを食べながら二人はベンチに腰をかけた。「トオル、これ覚えておるか？」きよが指をさしたのは地味な色のスカートだった。

「トオルが初めて買ってくれたスカート。大切な宝物じゃ」

「覚えてるよ、でも今のきよには地味だね」「ううん、これがいちばんの お気に入りじゃ」きよは愛くるしい笑顔で微笑む。記念にいかがですか？かわいらしいバックを背にキャラクターの着ぐるみと楽しそうに記念撮影をしている。「きよ、俺たちも撮ってもらおうよ」きよはうなずく。「はい、いいですか？もっと近づいて。

はい撮りまゝす。」出来上がった写真を二枚買い、一枚は自分のポケットに、もう一枚はきよの鞆に入れた。「ありがとう、トオル。

大切にする」きよは鞆をぎゅっと抱きよせた。楽しかった遊園地を後にし、駅についた。家に着くまでの間、しばらく二人は黙ったままだった。楽しかった時間が終わってしまい、トオルはもうすぐ新学期。きよと朝から晩まで過ごすわけにいかない。少しでもきよと一緒にいたかった。きよの手をそっととる。きよもぎゅっと握り返す。トオルの足が止まり、二人は見つめ合う。自然とだった。唇と唇が重なり合った。トオルは一生きよといたい、そうしよう。心に決めていた。明日から学校が始まる。しっかり勉強して大学へ入って、きよと生活していくんだ。すがすがしい気持ちで二期の朝を迎えた。「いってらっしゃいトオル。今日は何が食べたい？」すっかり料理の腕前を上げたきよ。「まるで新婚だな」苦笑いをしながら真一が先に出た。「じゃ俺も行ってくるよ」いつまでもトオルに手を振っている。始業式も無事に終わり卓也に声をかけられる「トオル、何だよ最近付き合いわり々な、彼女でもできた？」フフッと笑うトオルに「えっ！？まじで？だれだれ？」「今度紹介するよ、じゃな」足早にトオルは学校を後にした。「あっ、きよ」スーパー

に買い物に来ていたきよを見つけた。「ずいぶんたくさん買ったんだな」「今日は荷物が多いからこれに乗ってきたの」と自転車を指す。「乗れるのか？」自信なさげに きよが笑う。「よし、乗れよ。俺がこいでやるからさ」前かごに食材を詰め込み、後ろにきよを乗せた。久しぶりに風を切った。きよは かえでといたころを思い出していた。一気に坂を下る。トオルの背中にぎゅっとつかまりながら・・・「あれ？おい！どうなってんだ？」「どうしたの？」「ブレーキがきかない！」もうすぐ大きな交差点に差し掛かる。このまま突っ込んだら大変なことになる。トオルはパニックになった。もう駄目だ！ぶつかる！ワアァー！

「トオル？トオル？」名前を呼ぶ声に気がついた。「よかった、あなたが事故にあったって聞いてびっくりしたのよ。大丈夫？かすり傷くらいでよく済んだって先生が。」「そうだ、坂道を下ってたら自転車のブレーキがきかなくて・・・きよは？きよはどうした？後ろに乗ってたんだ」「あなたとぶつかった車の人が救急車呼んでくれたんだけど、自転車に乗ってたのはあなた一人だって。そう・・・一緒だったの・・・」なんだよ？なんなんだよ？じゃあ きよはどこに行っちゃったんだ？帰っちゃったのか？いなくなったのか？しばらくトオルは声を殺して泣いた。美智子はそっとしておいてやろうと病室を出る。胸のポケットから取り出した一枚の写真。きよと一緒に取った、たった一枚の宝物の写真。「きよ、これで良かったんだよな。きよも家族の元に還れたんだ。きよありがとう」トオルはずっと写真を見ていた。

「きよ！きよしっかりしてくれ！」「姫！」うつ・・・「良かった、姫が目覚められましたぞ」皆が安堵した表情を浮かべている。「姫様、探しておりました。かえではすぐに見つかったのですが、姫様が今朝がた沢の麓で倒れておられるのを見つけ」心配そうに覗きこむ両親「父上、母上・・・」「あゝ良かった きよ。もう大丈夫で

す。母がそばについておりますよ」安心してきよは眠りについた。どのくらいたっただろうか、きよは目覚めた。かえってきたのか、私はトオルの背にしがみついていた。そして、大きな衝撃を受けた。きよは辺りを見回す。枕元には肩から掛けていた鞆が置いてあった。きよは起き上がり、鞆の中をそつと見る。大切に入れていたトオルとの写真。目にいっぱい涙を浮かべ、写真を胸にそつと抱く。「トオル・・・楽しい時間をありがとう。でも共に過ごしたかった。共に・・・君と永遠に・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8627o/>

君と永遠《とわ》に

2010年11月12日06時33分発行